

第14回県政知事懇談

湯崎英彦の地域の宝 チャレンジ・トーク (世羅町)

と き 平成27年9月5日(土)
ところ せら文化センター(小ホール)

	目 次	頁
開 会	1
知事挨拶	1
事例発表者紹介	2
事例発表①	3
事例発表②	10
事例発表③	18
事例発表④	21
閉 会	26

広 島 県

開 会

○司会（豊田）

皆様，改めましてこんにちは。大変長らくお待たせをいたしました。

ただいまから，「湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」開催いたします。

私は，本日司会の広報課，豊田と申します。本日は，チャレンジに向けて元気が出る会にしたいと思っておりますので，どうぞよろしく願いいたします。

（拍手）

知事挨拶

○司 会

では初めに，湯崎英彦広島県知事をご挨拶申し上げます。

●知事（湯崎）

皆様，こんにちは。

今日は土曜日で，皆さんいろいろお忙しいところだと思いますけども，たくさんお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

この県政知事懇談ですけれども，世羅町におじゃまするのは3回目。1回は県内を8地域に分けてやったので，世羅町はあの時は，尾道と一緒にさせていただきました。その時以外は各県内の23市町それぞれ回らせていただいて，皆様からお話をお伺いをするということを進めてきましたけども，これも，この4巡目ということでそれなりに蓄積が出てまいりまして，これまで67回開催をして発表者は551人に上るということでもあります。ご来場いただいた皆様も8,200人を超えるというような状況で，当初から皆様のいろんなご意見も含めて，私どもとしてはそのご意見を味噌樽に入れてですね，しばらく熟成させるといい味噌ができるんじゃないかということで県政の隠し味にしていまいりますというふうに申し上げてきたんですけど，おかげさまでその味噌も随分とたまって発酵もしてきたかなと。おいしい味噌ができていろんなところで我々県庁全体にあの施策この施策というよりは，いろんな考え方のベースとして役立たせていただいているんじゃないかというふうに思っています。

それから，今日も4組の発表の皆様に来ていただいているんですけども，チャレンジトークということでそれぞれいろんな場面でご活躍をいただいているお話をいただきます。いつもこの会が終わる時には発表を聞いてよかったなっていうふうに皆さんおっしゃっていただけるので，今日もそういう幸せになる発表をいただけるんじゃないかなというふうに楽しみをしておるところでございます。

今日は、来る前に2カ所ほど現場訪問をさせていただきまして、まずは皆様ご承知のとおり、世羅の梨ですね。このブランド化に取り組まれておられます世羅幸水農園さん。ここを訪問させていただきまして、私、本格的な農園っていうのは初めて見せていただいたんですけど、すごいなというか、たわわに実る梨ですね。がぶりとかじりついたんですが、ぜいたくな梨の食べ方をしてすごくおいしかったなというふうに思いました。木も古いものはもう50年になるということですね。すごい蓄積だなあというのは改めて感じたところであります。

それからその後は、大田庄歴史館にまいりまして平安時代からのこの町の歴史をいろいろとお伺いをさせていただきましたし、いろんな古文書ですね、これがあるんだと。それでこの証拠として、そういう古文書っていうのは昔の争い事があったときに使われてましたとか、いろんなことを見せていただいたのと、古くからやはり世羅が大変豊かなところだったということを改めて勉強させていただきました。

そのまま参道を上りまして今高野山龍華寺のほうにおじゃまをさせていただきました。ここも大変古いお寺であり今高野山の荘園として発展をしてきた時からお寺があるということをお伺いしまして、なおかつ今のお堂も、これ自体も何回も焼けてるんだけど、今あるものだけでも既に300年ぐらいはたってますということで、非常に深い歴史があるんだなというのを改めて感じたところであります。

こういったこの現場訪問含めて今日は奥田町長が来ていらっしゃいますけども、世羅町の皆様に大変お世話になりましたので、この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。

それでは、これから4組の皆様の発表をお伺いをして、これからの世羅町、そして広島県づくりにどういうふうに取り組んでいったらいいのかということを考えるきっかけになったらというふうに思います。

それでは、どうぞよろしく願いをします。

○司 会

湯崎知事、ありがとうございました。それでは、知事、檀上の席にお移りください。

事例発表者紹介

○司 会

それでは、本日の事例発表者の皆さんをご紹介します。発表者の皆さんは、檀上へお上がりください。

それではご紹介をさせていただきます。皆さん向かって左から、ランニングを柱にした観光メニューの開発など、世羅の魅力を多くの人に伝えている世羅町観光協会の西原淳さんです。(拍手)

続きまして、小学校教諭から農業者へ転身されまして、安全でおいしい生産者の顔の見える野菜づくりに取り組んでおられる森澤祐佳さんです。(拍手)

続きまして、元気に頑張る姿を地域に発信し、活力ある地域づくりに貢献している町立世羅中学校3年生の佐古芳喜さん、柴田恵さん、得納ほのかさんです。(拍手)

続いて、世羅茶を再生し、和菓子などの加工品開発で地域の活性化に挑戦されている県立世羅高等学校3年生の七ツ河亮太さん、嶽和馬さん、それから2年生の瀬尾百涼さんです。(拍手)

どうもありがとうございました。では、事例発表者の皆様は一旦席にお戻りください。

それではここからは湯崎知事にコーディネーターをお願いしたいと思います。

それでは湯崎知事、よろしくお願いいたします。

事例発表

事例発表①

●知 事

それでは、改めましてどうぞよろしくお願いいたします。今日、事例発表を今ご紹介のとおり4組の皆様にご招待とさせていただきます。それぞれ地域であるとか職場、あるいは学校で大変に積極的に活動をして挑戦をされてる皆さんであります。

最初に発表いただきますのが、せら高原RUNRUNプロジェクト実行委員で世羅町観光協会の西原淳さんでございます。改めて西原さんをご紹介させていただきますと、西原さんは好きな世羅のために仕事がしたいということで6年前にUターンをされたということでもあります。世羅の魅力を多くの人に伝えるためにランニングを柱とした観光メニューの開発であるとか、あるいは合宿を誘致するという事で駅伝のまちとしての地域振興に取り組んでおられます。また、世羅町観光協会が運営しております今年5月にオープンした道の駅世羅ですね。こちらで観光コンシェルジュを常駐させるなど、コミュニケーション重視の観光情報の発信に努めて新たな観光拠点の確立に努めていらっしゃいます。

そして今日の発表のテーマですが、地域資源の活用による新たな魅力創出です。

それでは西原さん。よろしくお願いいたします。

○事例発表者(西原)

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました西原です。どうぞよろしくお願いいたします。

いたします。先ほどご紹介いただいたように今日は地域資源の活用による新たな魅力創出と、まあ偉そうな題名をつけてしまったんですけども、10分程度お聞きいただければと思います。

まず、私のプロフィールですけども、1996年に世羅高校を卒業しました。現在は37歳です。世羅高校では、今はなき環境科学科の第1期生として入学し、在学中は陸上競技部で部活動に励んでおりました。私の時代は県予選で敗退し、3年間一度も都大路へ出場することはありませんでした。

高校卒業後は県外で学生生活、会社勤めをし、平成21年4月より観光協会に勤務しています。現在は事務所を道の駅世羅に移し、道の駅の運営管理、及び世羅町の観光振興に取り組んでいます。

観光協会の役割をわかりやすく表現しますと、つなぐということかなあと私自身は思っています。観光客、すなわち世羅にお越しいただいた人と観光施設、観光客を迎え入れる人とをつなぐことこそが観光協会の役割だと思っています。また、観光施設の情報を集約し、訪れる、訪れようとしている人たちに情報発信をする。このことが観光協会の業務において最重点だと考えます。

本題に戻ります。世羅町における地域資源、皆さんは何だと思えますか。私自身が思う地域資源は世羅イコール駅伝です。「世羅から来ました。」と言うと、「ああ、あの駅伝の強い高校があるところだよな。」と、どこに営業に行っても私は言われてきました。知名度の高い地域資源、駅伝すなわち走ることを観光に活用できないか。私はそう考えるようになりました。8度の全国制覇を誇る世羅高校の活躍に加え、自然豊かなランニングコースや、走る神様、韋駄天様が祭られる修善院など、走ることに関連した資源も多く存在しています。

そんな中、取り組んだのが以下のとおりです。

平成21年度から平成23年度までの3年間は、走ることは観光に活用できるのかを、モニターツアーを通して分析しました。

そして、平成23年度。これまでの取組から商工会を中心に行政、観光協会が連携し、駅伝のまちせら、せら高原RUNRUNプロジェクトに取り組み、合宿誘致に乗り出しました。

平成23年度、世羅町に箱根駅伝出場校がやってきました。青山学院大学です。ご存じのとおり、監督は世羅高陸上部OBです。そういった縁もあって、20名という大所帯が6泊7日のスケジュールで世羅合宿を開催しました。初めての受け入れということもあり、準備不足もありましたが、事故なく7日間終えることができました。また、ロードを使った距離走の際には町民の方々が車を止め声援を送ってくださるなど、走ることが根づいた土地柄だと改めて実感しました。

翌年24年にも2度目の合宿を開催。直後の出雲全日本大学駅伝では見事初優勝し、青学

史上、大学三大駅伝初制覇となりました。

そして、記憶に新しいことと思いますが、今年の箱根駅伝ではワクワク大作戦のもと、ついに総合優勝を成し遂げました。この優勝メンバーのうち、実に6名もの選手が世羅合宿に参加していました。後列左端原監督の横が、新・山の神となった神野大地選手です。当時は1年生で、この時はけがしたところが炎症を起こし発熱し、夜、病院で治療を受ける際は付き添いました。先般久しぶりに顔を合わせる機会がありましたが、当時のことをしっかりと覚えてくれており、懐かしく話をしました。

以降は県内の大学生や中学生の合宿を積極的に受け入れてきました。大学生の合宿は長期休暇時に開催するなど制限はありますが、このたび全線開通した中国やまなみ街道をチャンスと捉え、10月に行われる出雲大学駅伝の直前合宿などの誘致にも現在取り組んでいるところです。

いずれにせよ、ハード面として競技場がないというハンディはありますが、自然豊かなコースを中心に合宿誘致を継続していきたいと考えています。

合宿以外のことについては走ることで観光の融合ということで、観光施設を走ってめぐると観光RUNにも取り組みました。通常は車で観光施設をめぐるところを走ってめぐるという内容ですが、途中の休憩ポイントで世羅の自然を感じることで、特に女性に人気の新たな観光メニューが生まれたと感じました。合宿によりこれまで町内に宿泊した数は900を越えます。この数字をさらに伸ばしていくことはもちろん、世羅の地にしかない資源を有効に活用するとともに、魅力を融合させたコンテンツもつくっていきたいと思います。

続いての世羅の地域資源は5月23日にオープンした道の駅世羅です。ここで国が掲げる道の駅の目的と機能についてです。これは国土交通省のホームページより引用しました。

道の駅の機能は、1休憩機能、2情報発信機能、3地域連携機能となっています。物品の販売、野菜の販売などという文言は一切出てきません。

道の駅世羅のミッションです。道の駅世羅は町内を周遊してもらうための情報発信に力を入れ、拠点としての役割を担っています。世羅の花農園、果樹園、産直市場、飲食店、多くの魅力ある施設へご案内します。

また、地域振興という意味では、地域の人に道の駅を活用してもらう楽しんでもらえる仕掛けを行っています。こちらは営業が終了した道の駅を活用し、町民、地元の人に道の駅に足を運んでもらおうとキリンビールの協力のもと、ビール教室を開催しました。40人の定員はキャンセル待ちが出るほどの人気でした。また、当日提供したおつまみは全て道の駅に出荷する人たちにお願いしました。地域振興という点においてはこのようなイベント開催こそが大きな意味をなしてくると私は思いますし、道の駅が地域に貢献できる瞬間ではないかと考えます。

さらには夏休み特別企画として、町内の小学生と親御さん向けに瀬戸内バーベキュー協会とタッグを組み、バーベキュー講座を開催しました。食を通じたイベントを開催するこ

とで多くの笑顔が道の駅に咲きました。

これまでの道の駅といえば物売りが先行し、本来の機能を失いかけている気がします。道の駅世羅はそこに来る人とそこに住む人双方に喜んでもらえるよう、イベントを通じ魅力を伝えたいと思っています。

これからも世羅町の観光振興と道の駅世羅をよろしく願いいたします。

本日はこのような機会を与えていただきありがとうございました。

(拍手)

●知 事

ありがとうございました。西原さん、世羅にUターンってということで、世羅で生まれ育ったっていうか、高校は世羅なんですよ。

○事例発表者（西原）

はい。世羅に18歳までいました。

●知 事

18歳までずっと育ってこられたということですね。

○事例発表者（西原）

はい。

●知 事

で、その後は学生生活、社会人生活と、外におられたということなんですが、これはどのあたりにおられたんですか。

○事例発表者（西原）

学生は福岡でその後大阪の会社に就職しまして、ここへ帰ってくる前は広島 회사にいました。

●知 事

そうなんです。じゃあ各地いろいろいらっしゃいましたけど、世羅が好きでお帰りになったんだと思うんですけど、どうでしたか。ほかの地域での暮らしってというのは。

○事例発表者（西原）

外の。

●知 事

ええ。外の暮らし。

○事例発表者（西原）

そうですね。やはり福岡っていうところもやっぱり九州最大の都市ですし、食べ物がおいしかったりしましたし、大阪も大阪の方独特の人間味があってですね、やはりそれぞれの土地に魅力があるんだなあと感じました。で、やはり地元を目を向けたときに、やはり世羅って自分が18年間育ててもらったところっていうのは大阪にも福岡にもない、人のよさとかやっぱり自然の豊かさを感じられたので、やはり帰ってきたいと思うきっかけになったんだと思います。

●知 事

なるほど。で、実際に帰ってきてみていかがでしたか。改めてそれを経験した後での世羅ってというのは。

○事例発表者（西原）

そうですね、やはり僕が帰ってきた時にはもう、3つの町が合併してましたけど、やはり世羅っていう町が1つになってるなあと。やっぱり自然も多く残ってましたし、何より皆さんが陸上、世羅高校、駅伝だけじゃないですけど世羅高校を応援してくださってるのがやっぱりひしひしと感じられたので、世羅っていいなあと思いました。

●知 事

改めてですね。

○事例発表者（西原）

はい。

●知 事

それで今、観光協会で観光振興をやっていただいているんですけども、もう6年でしたっけ。この6年はどうですか。手ごたえは。

○事例発表者（西原）

そうですね。ありがたいことにいろいろやらせてもらえたなあと思っています。この合宿誘致にしてもそうですけども、この6年間もいろいろな部分で協力してもらったり、各事業

者にしてもらって、ほんとにいい経験になったなあと思いますけども、何分5月23日からの3カ月間のほうがもっといろんな意味でいい勉強になってるかなあと思います。

●知 事

道の駅ができてから。

○事例発表者（西原）

はい。

●知 事

それはどの辺りでしょうか。

○事例発表者（西原）

そうですね。やはり世羅町に初めてできた施設をやらしてもらえてっていうのは、いい意味でもいろんな意味でですね、ほんとに貴重な経験になってると思います。

●知 事

なるほど。合宿も、何かすっかり定着した感がありますかね。

○事例発表者（西原）

そうですね。23年、24年と箱根駅伝に出場する青山学院が来ましたんで、一定の成果が出たかなあと思いつつも、その後がですね、やはり気象条件とかあとはやっぱりハード面とかいろんな部分があるんですけども、やはり合宿のメッカと言われるやはり長野とかあちら方面に若干取られてるような気がします。

ただ、大学を狙っていくのか、あとやっぱり地元世羅高校に入ってくる中学生をしっかりと狙っていくのか。これは今後も考えていかないといけないと思うんですけども、走る環境がすばらしいということには間違いなと思いますので、引き続き合宿誘致には取り組んでいきたいなと思います。

●知 事

なるほど。道の駅でもいろんな工夫をされて、ビール教室ですか。これもおもしろいなあと思ったんですけど、そしてそこに出られているのが、道の駅に出荷をさせていただいている皆さん。これ何か仲間を募ってみんなで参加してもらって、いい感じでしたね。

○事例発表者（西原）

そうですね。もちろん参加者も喜んでいただけたんですけども、出荷者の方も新たなメニューを開発する中でですね、やはりそのテストマーケティングじゃないですけども、そういった部分にうまく活用いただけたので、また10月11月とですね、日本酒の会とかワインの会とかも計画しています。その辺でまた皆さんで協力していろいろ盛り上げていけたらなと思います。

●知 事

なるほど。ちなみにこれは道の駅だから皆さん車で来られるんですけど、問題ないんですか。

○事例発表者（西原）

ちゃんと免許証の確認とかハンドルキーパーの確認、またこの対象者がどちらかという
と地元の人にしてますので、前回では飲酒運転はゼロでございます。

●知 事

なるほど。そこはよろしく願いをします。

○事例発表者（西原）

はい。わかりました。

●知 事

今日も、さすがRUNRUNプロジェクトということで、もう、今、走ってこられたんですかっていう感じの格好ですけど。

○事例発表者（西原）

これ、道の駅のユニフォームなんです。

●知 事

それ全体が。

○事例発表者（西原）

はい。ミズノさんの全部これユニフォームです。靴も赤と緑です。

●知 事

すいません。私、存じ上げなくて。じゃあ何かもう道の駅も走るのがテーマみたいな感

じにつくり込んでおられるんですか。

○事例発表者（西原）

スタッフが私より全員若いので、やっぱり元気よさをしっかりと発揮しています。

●知 事

なるほどね。世羅のブランドですよ。

どうもありがとうございました。ほんとにこの世羅といえば農業ですけども、今は確かに全国ではこの駅伝ということで名をはせていらっしゃる。それはこの世羅で生まれ育って、ラブ世羅の西原さんが振興されてるっていうのは、ほんとに皆さん心強い限りじゃないかと思えますけども、これからもきっと、この世羅町のために頑張っていただける西原さんに、本当に今日すばらしいプレゼンをいただいたお礼を込めてもう一度皆さん、大きな拍手をお願いしたいと思います。

（拍手）

○事例発表者（西原）

ありがとうございました。

●知 事

どうもありがとうございました。

事例発表②

●知 事

それでは次のプレゼンテーションですけども、農業を経営されていらっしゃる森澤祐佳さんをお願いをしたいと思います。

森澤さんですけども、出身は呉なんですね。呉市のご出身で、最初は小学校の先生としてこの世羅町にやって来られたということであります。そういう中で、世羅町の豊かな自然と温かい人々との触れ合いの中、地域の農業の大切さを感じて深刻化する耕作放棄地や後継者不足の問題に少しでも役に立ちたいという思いから農業に転身をされたということだそうです。

現在は安全でおいしい生産者の顔が見える野菜づくりに努められて、産直市などで消費者へ世羅の恵みを届けていらっしゃるということであります。

今日の発表のテーマは、「子どもたちが帰ってくるふるさと」です。

それでは森澤さん、よろしく申し上げます。

○事例発表者（森澤）

よろしくお願いいたします。

こんにちは。先ほどご紹介いただきましたユニオンフォレスト株式会社農業事業部森澤祐佳と申します。本日はよろしくお願いいたします。

このようなすばらしい場所を設けていただき、本当にありがとうございます。今、私です。ね、チャレンジしていることを少し紹介させていただきます。

本日の骨子ですが、「新米教師として赴任したせらのまち」、「決断、志」、「農業の実際」とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

では、「新米教師として赴任したせらのまち」ということで、私が教員をやめて農業を始めるのに至った経緯を語るには教員時代は欠かせません。

まず、私がどんな子供たちや町の方に出会い、どんなことで心が動いたのかを紹介させていただきます。

今から7年前。私は世羅町立世羅西小学校に赴任することが決まりました。当時のことを振り返ると、縁もゆかりもない世羅町でやっていけるのかという不安でいっぱいだったことを覚えています。

私は呉出身で、住んでいたところは団地っ子だったので、初めて世羅の町に来た時に言葉が出ないくらいびっくりしました。なぜかという、校区内にはスーパーもコンビニもなく、またアパートもなくて見渡す限り田んぼが続き、何かこう、寂しいような印象があつて、大丈夫かなあつて感じたのを今でもよく覚えています。

しかし、そんな不安はあつという間に消えました。それは出会った子供たちが私にとって最高の出会いとなったからです。素直でかわいくて毎日一緒に生活することがとても楽しかったことを覚えています。

その中で私がカルチャーショックを受けたことがいくつかあります。1つ目は給食です。世羅町の皆さんにとったら当たり前かもしれませんが、子供たちが毎日家からお弁当箱に白いご飯を入れてくるんですね。つまり自分の家のお米を食べるってことなんですけど、私が子供の時は毎日ほとんどパンでした。週に1回ご飯も出てきましたけど、それは給食から出していただいていたので自分の家からお弁当を持ってくるってことはなかったもので、ああ、これは自分の家のご飯を食べようっていう取組なんだなと思って、驚いたことを覚えています。4月7日でしたか、6日でしたか。先輩の先生が、「おい、森澤。あしたはちゃんにご飯持って来いよ。」って言ったんですね。何で持って来にゃいけんのかなあつて、最初意味がわからなかったんですけど、ああ、学校全体で、町全体でそういう取組をしているんだなあつて改めて感じました。

また、子供たちは、「先生のご飯は呉の田んぼでつくつとるんか。」と聞いてくるんですね。「いや、スーパーで買うんよ。」って言ったら、「それはおいしいんか。」と。そんなエ

ピソードもありまして、子供たちにとって田んぼやお米っていうのがほんとに身近なところにあるんだなあっていうのを1年目に感じました。

学校の中にふるさと学習っていうのがあるんですけど、世羅町では子供たちのふるさと愛を高めるために、ふるさと学習という体験活動を教育活動の中心に据えています。そのため、地域の自然や働く人に出会い、また、体験し、体全体でふるさとを感じます。そのおかげで子供たちはふるさとのいいところを知り、ふるさとを自慢に思い、ますますふるさとのことが好きになっていきます。

ここにこのようなアンケート結果があります。少し、私がいたころなんで古いものではあるんですけど、あなたはふるさとが好きですかという問いに対して、9割近くの子供たちが好きです。と肯定的に回答しています。私の子供のころを思い出してみても、ふるさとが好きと自信を持って言えたかといえば、言えてなかったんじゃないかなと思います。

「2・決断と志」。4年間世羅西にどっぷりつかり、とにかくがむしゃらに走って教員時代を過ごしてきました。その結果、私はいつの間にか世羅西が大好きになっていました。住めば都という言葉がありますが、まさに私にとって最高のふるさとになりました。

ただ住むだけではここまで愛着を持つこともなかったでしょうが、子供たちというフィルターを通して見てきた世羅西の世界が大好きになりました。4年間、保護者にも恵まれ、地域の方とも多く知り合い、多くの方の支えで自分がここまで頑張ってきたと思ったとき、世羅西を去っていいのかという思いが出てきました。初任者は4年で他市町へ転勤。確実に世羅西を去らなくてはいけない。これは変えることができない決まりです。自分を育ててもらったこの町。この町の子供たちに何か恩返しはできないか。このまま去ってしまいたくない。そんな思いで迎えた最後の年。他市町で教師をこのまま続けるよりもどうしたら世羅西に残ることができるかを考え始めていました。

そんな時思い出したのは、ふるさと学習で出会ったおじいちゃんやおばあちゃんたちの言葉でした。この町には若者が帰ってこん。わしらが田んぼがでкинようになったらどうなるんかのう。農業はもうからんし、こんな大変な思いは若者にはさせたくないのう。みんなふるさとは大切にしていきたいという思いは同じなのに、何かギャップを感じました。みんな世羅西が好きでふるさとを守りたいのに、未来が見えないのはたくさん問題があるんですけど、中でも産業がなかなか機能しないからじゃないかなあと考えました。

世羅西で産業を活性化させるには、農業。農業しかないと思いました。なぜなら見渡す限り田んぼだからです。

そして、ついに私は教員をやめる決断をしました。誰かに農業をやってもらうわけにもいかないですし、農業をやってる人に指示をしても仕方がない。自分の体で農業を一から学び、自分で経験しなくては誰も動いてくれないと思ったからです。あの時、28歳。今やらないと一生できない。大好きな教職という仕事はこの夢をかなえてからでもきつとできるという思いで教師をやめ、農業の世界へ入ることを決めました。

そして、これが私が農業をするに当たって決めた志です。

子供たちが帰ってくるふるさとをつくる。農業を産業にする。農業でもうかるシステムをつくる。都市と田舎をつなげる。ということです。

実際に農業をするに当たって、何も知らなかったので1年間、世羅西にあるヤンマーファームというところで1年間研修をさせていただきました。その後、世羅町の下津田というところにですね1.3ヘクタールの農地を借りました。大体球場1個分なんですけど、世羅西にこだわってぎりぎりまで土地を探していたので、数年間耕作放棄地だったため、雑木、雑草、石がとても多い土地でした。地域の方や社員の皆さん、それから地域の子供たちの協力で少しずつ荒れた土地が畑に変わっていきます。

これが今年の8月の終わりの3年目の畑の様子です。今年はあまりつくられていない落花生をつくろうということで、落花生をつくってます。ほかにもハウレンソウやカブトムシもちょっとやったりとか、それから落花生とかニンジンとかもつくっています。自分の農園だけでなく、毎年地域の世羅西小学校の子供たちが来てくれて、一緒に今年は落花生の苗を植えたり、タマネギの収穫をしたり交流活動も続けています。

そして、今年から新しく始まったツバキっ子ふれあいファームというのをやっています。それは、小学校と地域の農業法人、そして私たちが協力して子供たちの食育をしていこうというプロジェクトを始めています。畑は小学校の横にあり、いつも子供たちが気かけられる場所にあります。今年は初年度ということでサツマイモとカボチャを全校で植えました。できた野菜は給食センターで調理してもらい、メニューは子供たちにも考えてもらおうと思っています。少しずつ子供たちにも農作業を体験して農業ってものが楽しいってことを伝えていければを増やしていっています。

この9月でせらにし旬菜園が始まって2年半が終わろうとしています。2年半を通じて感じたことは、農業は毎年1年生であるということ。予期せぬことが多々起きるということです。種まきしたばかりの種が豪雨で流されたり、収穫直前のトウモロコシをイノシシに食べられたりと、数えきれないくらいの予想もつかないことが起きるのが農業だと感じました。

しかし、いろいろ試行錯誤をし、2年半。何とかおいしいと言っていただける野菜がある程度安定してでき始めています。それは私たち人間の力というよりは自然の力によっておいしいものをつくらしてもらってるんだなと感じています。特に世羅町は寒暖の差や冬がとても寒いということで自然の力を借りながら、また、動物たちと上手に共存しながらこれからも農業を頑張っていこうと思っています。

最後に、世羅西という町を好きになって約6年が経ちました。給食で毎日ごはんを持参すること。ゴールデンウィークには田植えを手伝うこと。当たり前になっている子供たち。新米教師の私を気遣い、野菜を分けてくださった保護者の皆さん。そんな温かい人々の中で農業の大切さを知りました。

採算のめどがつく前に動き始めたことを企業としては褒められることではないでしょう。しかし、お世話になった町に自分ができることをと考えたとき、いても立ってもいられなくなりました。ユニオンファームせらにし旬菜園はそんな時に生まれました。これからも地域の方に協力してもらいながら成長していきたいと考えています。おいしい野菜をつくることが私のゴールではありません。子供たちが帰ってくるふるさとをつくることが私のゴールです。大きな志を忘れることなく明日からまた、頑張っていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

●知 事

はい、森澤さんありがとうございました。

呉も結構田舎もありますけど、どちらかというとな呉の都会のほうのご出身ですか。

○事例発表者（森澤）

都会ではないんですけど、団地です。

●知 事

団地っ子なんですか。

○事例発表者（森澤）

はい。

●知 事

僕も、僕の時には給食でご飯というものは出たことはなかったですね。だから全部パンで、卒業してからご飯が出るようになってカルチャーショックを受けたんですけど、ご飯が、そもそも持ってくるっていうのは、これはカルチャーショックかもしれないですね。私も初めて知りました。

○事例発表者（森澤）

ほんとにびっくりして、秋にはマツタケご飯持ってきてる子もいたので。いいなあと思いつつながら。

●知 事

いろいろそれぞれ工夫があつてね。

でもそういう中で、この、農業者へ転身するというのも、先ほど決断という言葉も書いてあったんですけども、例えばご両親とか、今も呉にいらっしゃるんですかね。

○事例発表者（森澤）

はい。両親はいます。呉のほうに。

●知 事

反対とかはされなかったですか。

○事例発表者（森澤）

何か、好きなようにしなさいっていうような感じでしたけど。

●知 事

なるほど。先生からこの農業者っていうのはね、なかなか珍しいパターンだと思いますけど、どなたかほかにご存じの方いらっしゃいます。

○事例発表者（森澤）

いや、それは私は知らないですけど、先生方にはやめとけっていうふうには結構言われました。

●知 事

そうですか。ひょっとしたら日本で初めての先生から農業者かもしれませんね。

○事例発表者（森澤）

それはないと思います。

●知 事

いや、かもしれないです。そうですか。

でも本当に農業は大変苦勞をしますし、先ほど毎年毎年が新人っておっしゃいましたね。ただ、先輩もたくさんいらっしゃいますよね。世羅には。

○事例発表者（森澤）

はい。

●知 事

皆さんどうですか。優しくしていただいていますか。

○事例発表者（森澤）

そうですね。地域の方々には優しくしていただいて、いつまでにこれ植えないといけんよとか、今それやっても無理よとか、結構アドバイスは日々いただいております。

●知 事

研修はヤンマーファームでやられたのですか。

○事例発表者（森澤）

そうです。

●知 事

そういう意味では地域の農業者の方と、そこではあんまりご指導という形じゃなかったと思うんですけど、今、そうやっていると教えてくださる農家の皆さんっていうのはどんな方々なんですか。

○事例発表者（森澤）

今一緒に、ちょっと小さい産直をしまして、そこに私と一緒に野菜を出して下さっている世羅西ふれあい会というグループの方と一緒に産直活動をしているんですが、そのおばあちゃんとかにいろいろ教えてもらったりしています。

●知 事

ああ、なるほどね。そういう意味では、ある意味でいうとよそ者じゃないですか。けれども、そうやって皆さんからも受け入れていただいて。

○事例発表者（森澤）

そうですね。完全によそ者なんですけど、一番ありがたいのは地元で先生をさせていただいていたんで、その子供たちのおばあちゃんであったり、つながりがちょっとずつあるので、それはほんとにありがたいなと思ってます。

●知 事

なるほど。そこがもともとのスタートですからね。そういう意味では皆さんがサポートしてくれる、応援してくれるベースがあるということなのかなと思いますけども。そして私がすばらしいと思ったのは、ゴールがおいしい野菜をつくることじゃないと。これどういうことかと思ったんですけど。

○事例発表者（森澤）

帰ってくるふるさとをつくるというのがゴールです。

●知 事

すばらしいですね。そのために農業の目標も、農業を産業にすると。それから、もうかるシステムをつくると。そしてもうかるシステムをつくると。最後は、何でしたっけ。

○事例発表者（森澤）

都市と田舎をつなげる。

●知 事

そう。都市と田舎をつなげるね。これ、実は県が基本的に農業の方針として打ち出していることと全く同じですね、それを実際に実践していただいているっていうのは、ほんとに僕達もうれしいなという気がします。

今、若い人が地域に帰ってくる、あるいは農業に関心を持ってくれるということがだんだんと増えてるんですけども、森澤さんのように実践をしてくれるっていう方は、なかなか少ないんですけども、ほんとに皆さんにも支えられてだと思えます。新しい世羅、世羅の未来のため、世羅の子供たちのためにですよね。今後も世羅がずーっとつながっていくために、自分の身をささげていただいている森澤さん。もう一度大きな拍手をお願いをいたします。

（拍手）

○事例発表者（森澤）

ありがとうございました。

●知 事

ありがとうございました。

今も世羅西の学区には、スーパーもコンビニもないんですかね。

県内だったら、何かもう今やどこにでもありそうな感じもするんですけど。頑張ってください。

それでは、続いて、世羅町立世羅中学校3年生の皆さんに発表をお願いをしたいと思います。

佐古芳喜君、柴田恵君、そして得納ほのかさんのお三人です。

世羅中学校では、部活動や文化発表会などを通じて元気に頑張る姿を地域に発信することで、活力ある地域づくりに貢献をされています。また、自校や郷土に誇りをもってですね地域に貢献できる品格のある生徒を目指して地域の行事やボランティア活動に積極的に

参加されています。

今日の発表のテーマは、「本気になって1分の1へ、誇りを持って自慢できる学校に」です。

それではよろしくお願いします。

事例発表③

○事例発表者（佐古）

世羅中学校は全校生徒が、一つの事に本気で取り組む事ができる学校です。これまでの先輩たちが創り上げた素晴らしい伝統を、後輩が受け継ぎ、自分たちの手で、さらにより良いものを創り上げようと、生徒全員で目指していることが、私たちの誇りです。私たちは、先輩たちの思いを引き継ぎながら、先輩を超えるものを創り上げようと頑張っています。

今年の生徒会スローガンは、「本気になって1/1へ ～誇りを持って自慢できる学校に～」です。1分の1とは、生徒一人一人が持っている力を最大限に引き出すということです。そして、お互いに本気の力を出し合い、高めあうことで、友だち同士や先輩後輩の間に信頼関係が生まれ、つながりが深まります。そして、先輩から後輩へと思いをつないでいることが、私たちの誇りであり、自慢できることです。

これから、私たちが誇りに思い、世羅中学校の自慢できるいくつかを紹介させていただきます。

生徒全員で、本気の力を出し合い、自分たちの手で、創り上げる全校合唱は、私たちの誇りです。世羅中学校の校歌は、校歌としてはめずしい合唱曲になっています。私たちは、常に3部合唱で校歌を歌います。全校で歌い上げる校歌の合唱は、私たちの誇りです。

また、「大地を愛せよ 大地に生きる」「人の子ら 土に感謝せよ」。これは、世羅中学校で代々、歌い継がれてきた「大地讃頌」の一節です。私たちは、自分たちを育ててくれた、この世羅の大地や自然、そして、私たちをいつも優しく見守ってくれている家族や地域の方たち、学校、そして、世羅の町が大好きです。

そんな世羅の自然やいろいろな人たちへ「感謝」の思いを届けたい。それが、全校合唱の原点にあります。そして、家族や地域の方から、「自分たちも、この歌を歌ったよ」と聞くと、とてもうれしくなります。そして、歌い継ぐことの素晴らしさを誇りに感じています。

○事例発表者（柴田）

世羅中学校の挨拶も私たちの自慢です。世羅中学校では、相手に気持ちの良い挨拶を届けるために、「自分から」「立ち止まって」「笑顔で」「大きな声で」「会釈をしながら」という5つの要素を取り入れたレベル5の挨拶を受け継いでいます。レベル5の挨拶はそう簡

単にできるものではありませんが、学校の中で意識して取り組むうちに身につく、地域の中でも丁寧で気持ちのよい挨拶ができるようになります。

世羅中学校では学校に来られた訪問者の方に廊下などでレベル5の挨拶をしています。昨年からはレベル5の挨拶運動を広めるために世羅小学校に行き、児童玄関に立って朝の挨拶運動を児童会の人たちと一緒にしています。小学生に元気のよい挨拶をされるととてもうれしくなります。

また、地域の方へは日ごろの感謝の気持ちを込めて挨拶をしています。学校帰りに地域の方に挨拶をすると地域の方が、「お疲れ様。今日も部活だったんだね。あしたも頑張ってるね。」と、声をかけてもらい、しんどくて疲れていても元気になります。

○事例発表者（得納）

地域の方々とのつながりを深めいろいろな行事や取組に参加させていただいていることも私たちの誇りです。地域に貢献していると実感できるからです。

5月に広島市で行われるフラワーフェスティバルのパレードでは毎年たくさんの生徒が参加し、せらまち音頭を踊り、世羅町をアピールしています。このパレードのために地域の方が学校に来られ、私たちにせらまち音頭の踊りの指導をしてくださいます。パレード当日は着物を着つけてくださったり声をかけていただく中で、地域の皆さんとの温かさを感じ、町民の皆さんとのつながりを感じています。帰りのバスの中では、やり終えた達成感と感謝の気持ちでいっぱいになります。

地域の文化祭や行事にも参加しています。特に吹奏楽部は演奏の機会をたくさんいただいています。吹奏楽部ではただ演奏を聞いていただくだけでなく、小さな子供からお年寄りまで最後まで楽しんでいただけるようにキャストをつくったりダンスを入れたりして工夫を凝らして演奏をしています。

地域の方からは、中学生が演奏をすることによって保護者を初め多くの方々に来てもらえる、たくさんの方に来ていただくと地域の行事に覇気が出てうれしいという声もいただきます。地域の皆さんに音楽の楽しさと感動を味わってもらうとともに、人と人とのつながりができ、温かいまちづくりに貢献しているように思えます。

私たち生徒会は、体育大会や文化発表会の学校行事においても、世羅中学校の生徒の気迫のこもった演技や全力で表現する競技など、私たちが一生懸命頑張る姿を地域の皆さんに見ていただき、元気と笑顔を届けています。すると、温かい声援や励ましをいただき、逆に私たちがたくさんの元気をもらいます。

こんなに温かく育ててくださる方々がいる世羅の町が私たちの一番の自慢です。

これからも誇りの持てる学校を目指してさらに磨きをかけ、つくり上げていきたいと思っています。

○事例発表者（佐古）

これで世羅中学校の発表を終わります。

○事例発表者（3人で）

ありがとうございました。

（拍手）

●知 事

佐古君，柴田君，得納さん，ほんとにありがとうございました。今日は，世羅中学校の様子ということでいろいろとプレゼンをしていただきましたけれども，ここに出てきて，緊張しなかった。

○事例発表者（佐古）

しました。

●知 事

でもあんまり緊張したように見えなかったですね。何かすごい，マイクも使わないで発表して。マイク，わざと使わなかったのかな。

○事例発表者（佐古）

はい。いつも学校の行事とかでもこういう前で話させてもらう機会とかあるんですけど，でかい声出せてマイクなしでいつもやらせてもらっています。今日もマイクなしでさせてもらおうかなと。

●知 事

きっと後ろのほうでも十分聞こえましたよね。大きな声でほんとにしっかりと。

何かこの3人の中学生を見ていて，僕達大人は大丈夫かなって，こんなに大きな声は出ないし，こんなにしゃきつとしてないし。ずっと発表の間もしゃきつとして，教育をちゃんとしてるなという感じがします。大人になるとだんだんふにゃふにゃとなっちゃうたりして，反省をしましたけれども，世羅はやっぱり大好きですか。3人とも。

○事例発表者（佐古）

はい，好きです。

●知 事

大好き。そうだよ。ここで違うとももちろん言えないし。

だけどほんとに好きですっていうのを僕は何か全身からオーラで出てきたような気がするんですよ。いろんな全校合唱とか、レベル5の挨拶とか、みんなで演奏したり、せらまち音頭を踊ったり。せらまち音頭は尾道松江線の開通の時も皆さんに踊っていただきましたけども、ほんとにいろんな取組を通じて元気を発信をしていただいているんじゃないかなと。

1分の1へ、誇りを持って自慢できる学校に、もうなってるんじゃないかなと思いますけど。それをほんとによく発表していただきました。

佐古君、柴田君、そして得納さん。もう一度大きな拍手をお願いします。

(拍手)

事例発表④

●知事

ありがとうございました。

それでは最後の発表に移りたいと思います。最後の事例発表は県立世羅高校3年生の七ツ河亮太君、嶽和馬君、そして2年生の瀬尾百涼さんをお願いいたします。

世羅高校では、町や観光協会そして栽培農家などと連携をして、世羅茶の再生に向けて挑戦をされていらっしゃると思います。また、世羅茶を活用した和菓子などの新商品の開発や販売を通じて地域の活性化につながるんじゃないかということで取り組みをいただいています。

今日の発表のテーマ、「お茶の里世羅復活プロジェクト」です。

それでは、よろしく申し上げます。

○事例発表者（嶽）

ただいまより「お茶の里世羅復活プロジェクト」について発表いたします。

気をつけ。礼。

○事例発表者（3人で）

よろしくお願ひいたします。

(拍手)

○事例発表者（嶽）

世羅高校は来年度創立120周年を迎える歴史と伝統を誇る学校です。合言葉はTOPRUN世羅です。

普通科，農業経営科，生活福祉科の3学科からなり，各学科のカリキュラムを生かしさまざまな活動に取り組んでいます。農業経営科や生活福祉科の生徒は夏休みに地域の農園や介護施設などに出かけ，貴重な就業体験を実施しています。

部活動も活発で全国高等学校駅伝競走大会8度の優勝を誇る男子陸上競技部を筆頭に，たくさんの運動部が全国大会や県大会に出場しています。

また，国公立大学への合格や就職内定率100%など学習面においても確実な成果を上げています。

現在377名の生徒が在籍しています。

世羅高校では，夏休みに部活動やクラスでリーダーシップがとれる生徒が集い，地域の特産品を利用した商品の開発や販売，地域でボランティア活動を積極的に行うボランティア精神の育成など，地域や学校をリードする人材を育成するリーダー研修を実施しています。

本日の事例発表者である世羅町観光協会営業部長西原淳さんにも講師としてお越しいただき，世羅町観光事業の開発にかかわる学習や演習，実習を通して地域や学校の活性化，地域のリーダーのあり方について学びました。

また，昨年度，世羅が日本一探そうプロジェクトとして農業経営科の2年生が世羅高原カメラ女子旅や世羅高原6次産業ネットワークの方々とともに地域のことについて学び，広島大学生物生産学部の学生さんたちとともに世羅町のよさを見つめ直しました。

私たちは，このような活動の中から私たち自身が地域活性化の起爆剤となり，地域活性化に貢献したいと思うようになりました。

○事例発表者（瀬尾）

世羅町のことをさらに調べていくうちに，世羅町に県内唯一のブランド茶があることを知りました。世羅町では昭和初期にまちおこしの一つとしてお茶の栽培が盛んになり，栽培が拡大していきました。その後，広島県で初めて製茶の機械化がなされ，昭和8年に世羅茶として販売が開始されました。当時は300トン余りのお茶を生産し，関東に出荷されていたそうです。また，昭和の終わりごろまでは茶園が道沿いに広がる景色が見られていたようです。しかしその後，世羅町で農業の多角化によって生産量は徐々に落ちていき，栽培されなくなり，現在茶園は見る影もなく荒れ，製茶工場も廃虚となっていました。

私たちは世羅町に茶園があったことを全く知らない世代です。しかし，知らない世代だからこそ，その当時の茶園が広がる世羅町の風景を復活させることに興味を持ちました。

また，県内唯一のブランド茶ということを知り，私たち高校生もこの世羅茶を復活させ，有効活用できるよう開発に積極的に取り組んでいきたいと思い，世羅高校でできることは何かを考えました。

本校では農業経営科，生活福祉科，普通科の3学科からなり，その強みを生かし校内にお茶の里世羅復活プロジェクト実行委員会を立ち上げ，世羅茶の栽培と製品化に本校全体で参画することができると思います。このプロジェクトは広島県教育委員会の高校生による中山間地域わくわく事業として取り組んでいます。

○事例発表者（七ツ河）

現在の本校の活動は農業経営科が中心となり，大きく2つの取組を進めています。

1つ目は本校でも世羅茶を栽培するため，世羅茶栽培農家の方から世羅茶の苗をいただき，栽培を始めています。

2つ目は世羅茶を利用した和洋菓子の新商品の開発のため，世羅茶を粉末状にした場合の試作品づくりを始めています。

今後は世羅町や世羅町観光協会，世羅茶再生部会，世羅茶栽培農家，和洋菓子製造販売業者と連携し，実用化に向けて取り組んでいきます。

世羅町には6次産業ネットワークと本校の共同開発商品である，世羅っとした梨ランニングウォーターがあります。平成22年4月販売以来，広島県内外から大変な反響を呼んでいます。それに続く商品としてぜひ世羅茶を販売したいのです。それが現実になれば本校の陸上競技部が毎年12月に京都市で開催される全国高等学校駅伝競走大会で優勝した際に，地域の皆さんや応援に駆けつけていただいた方々とあったかい世羅茶でぜひ，乾杯したいと思います。そのためにも世羅町の地域活性化で私たち高校生ができることは何かを考え，これからも積極的に取り組んで行こうと思います。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

●知 事

七ツ河君，嶽君，そして瀬尾さん。どうもありがとうございました。

世羅高校といえばもう，ほんとにランニングというイメージですけども，同時にですね，地域の宝であるこの農業ですよね。その中でもお茶。お茶に着目をしたということで，これは今何年目の取り組みでしたっけ。

○事例発表者（嶽）

まだ苗木をもらったばかりなので，今，ハウスのほうで栽培しております。

●知 事

1年目ってということなのかな。

○事例発表者（嶽）

そうですね。1年目になりますね。5年目でようやく収穫ができるかなという段階なので。

●知 事

早く成長するように毎日拝んで卒業するまでに茶になれ一ぐらいに言うといいかもしれませんね。

でもこの、古くて新しいっていうんですかね。世羅茶。

新しい名産になるといいなという気がいたします。

高校生の発表はまた、高校生らしくて、まじめな中学生に一ひねりか二ひねりぐらいさられていて。3人とも世羅町出身なんですか。

○事例発表者（嶽）

僕は岡山県ですね。

●知 事

岡山。もちろんいいですよ。ウエルカムウエルカム。

七ツ河君は。

○事例発表者（七ツ河）

僕は生粋の世羅町の出身ですね。

●知 事

瀬尾さんは。

○事例発表者（瀬尾）

私は三次市出身です。

●知 事

そうなんだ。なかなかバラエティーに飛んで、世羅高校もなかなかやりますね。広域に生徒を呼んでるっていうことで。

ちなみに嶽君は岡山出身なんだけど、どうですか、3人。卒業したら広島に残りたいか。出ていこうかなと思ってるか。

○事例発表者（嶽）

岡山県のほうで畑とブルーベリーのほうがあるんですけど、曾祖母がちょっと倒れちゃって、継がなくちゃいけないんで。

●知 事

じゃあ、農業を継ぐという。

○事例発表者（嶽）

そうですね。

●知 事

ご両親の、ご両親というか代々続いた農家を継ぐっていうのはすばらしいことですからね。引き続き世羅も、きっと皆さんも応援してくれると思いますよ。

○事例発表者（嶽）

応援よろしくお願いします。

（拍手）

●知 事

七ツ河君と瀬尾さんはどうですか。

○事例発表者（七ツ河）

僕は、いつか中学校や高校の先生になって、母校である世羅中学校や世羅高校で勤務できたら一番うれしいかなというふうに思ってます。

（拍手）

●知 事

模範解答だね。

瀬尾さんはどうですか。

○事例発表者（瀬尾）

私は、いつか看護師か養護教員になりたいと思っているので、ちょっとまだ大学とかも決めてないのでわかんないんですけど、いつかは広島県には戻ってきたいなと思っています。

（拍手）

●知 事

ありがとう。

よくこの質問を聞くんですよ。高校生にね。

これ始めた最初、だから平成 22 年ぐらいは半分以上が、広島にはいたくないですという感じだったんですけど、今は、半分以上の皆さんが広島に残りたいとか、広島に戻ってきたいというふうにおっしゃっていただくんです。すごく心強く思っていますけど、岡山も広島に大変近いので我々仲間ですから、一緒に頑張れたらと思います。

今日はこの世羅高校の、この新しい取組、世羅茶の復活ということで、ほんとに世羅茶で乾杯、カンパイ！広島県ができたなら、素晴らしいと思いますけど、発表をいただきました七ツ河君、嶽君、そして瀬尾さんに、もう一度大きな拍手をお願いをしたいと思います。

(拍手)

○司 会

ありがとうございました。

以上で、予定の事例発表は終了となります。素晴らしい発表を本当にありがとうございました。

閉 会

○司 会

それでは、ここで、湯崎知事に本日のまとめをお願いいたします。

●知 事

今日はほんとに事例発表していただきました皆さん、改めてありがとうございました。

世羅町は、必ずしも非常に大きな町ではないんだと思いますし、もちろん高齢化であるとか、農業もいろんな大きな課題があると思いますけども、今日、発表をいただいた皆さんはそういう中で、ほんとにまずはこの世羅を愛していらっしゃるなということがよく伝わりましたし、そういう中で、いろんな工夫をして世羅のいいところ、宝っていうのがたくさんあるんだなっていうことを、皆さんそれぞれ発見をして、そしてそれをつなげていったり大きくしていったり、そしていろんな人に知っていただきたいというような、そういうことが感じられたんじゃないかなというふうに思います。

中学生の 3 人は、そういう中でほんとに中学生らしい、発表をいただいたんですけども、これからの世羅であるとか広島であるとか、あるいはもちろん広島とかも関係なく日本を支えてくれる素晴らしい若者が、ここ世羅で育ってるんじゃないかなというふうに感じら

れる発表をしていただいたんじゃないかなと思います。

ほんとに地域の中にある宝というか、素晴らしいものは探したらたくさんあるんじゃないかなっていうのを今日も改めて感じたわけですけども、それも、放っておいたら宝になるとは限らないですね。世羅茶もこれからだと思いますけれども、卒業するまでにはなかなかお茶を摘むところまではいかないかもしれませんけれども、これを続けていって磨いていったら、新しい宝になる可能性も大きく秘めていますし、これは昔は世羅の宝だったわけですよ。関東まで売って収入になったということじゃないかと思いますがけれども、いろいろ拾って磨いていくことができるんじゃないかなと。それを放っておかないでやっぱり磨いていくということがすごい大事なんだっていうことを、今日、皆さんに教えていただいたんじゃないかと思います。この皆さんのお一人お一人の、こういった放っておかないという、何か自分事にして取り組んでいく。口で言ってるだけじゃなくて皆さん実践していただいているんですけど、それによってこの世羅町が大きく変わって、それがまた広島県が大きく変わっていく。そういうものにつながっていくような気がいたします。

今日せっかくこういうお話をいただきましたし、ぜひ、また皆様もそれぞれのいろんな職場であるとか、学校であるとか、地域であるとか、いろんなところの役割をお持ちだと思えますけれども、その中で新しい宝を発見していただいたり、何か一步出て行動をとっていただくと、ほんとに素晴らしい広島ができるというふうに思います。

どうも本当にありがとうございました。改めて4組の発表の皆様にも、大きな拍手をお願いいたします。

(拍手)

どうもありがとうございました。

以上なんですけども、1つ私からお知らせというかお願いがございます。

昨年8月広島市で大きな土砂災害がありまして、75の方がお亡くなりになったということは皆様、ご承知のとおりだと思いますけども、こういった災害を再び発生をさせないということで、広島県では、防災、減災対策にこれまで以上に力を入れて取り組もうというふうにしております。さらに、この災害に強い広島県の実現、このためにはやはり県民の皆様のお力というのが非常に大事だというふうに思っております。自主防災組織であるとか、あるいはそれぞれの事業者さん、そして市や町の行政、もちろん県もですけども、一体となって、広島県「みんなで減災」県民総ぐるみ運動というのを今、展開を始めています。これ4月からスタートさせてるところなんですけども、お手元に資料を配布させていただいています。この運動では、5つの行動目標を定めて実施をするんですけども、特に、雨が多いこの時期にはですね、身の回りの土砂災害や洪水の危険箇所、そして避難場所や避難経路などをまずは知っていただくということが大変重要でございます。災害危険箇所や避難場所については、「県民総ぐるみ運動知る」で、検索ができるんですけども、本日は、この、後ろのところ、地図を後ろに張ってあるのをご覧いただければと思いますけど

も、いわゆるハザードマップですね。この危険がどこにあるかということを示した地図を掲示してありますので、今日お帰りの前に、ぜひこの機会、ハザードマップってどんなものか。自分が住んでるところはどうかというところかをご覧になっていただきたいと思えます。

また、ご家庭や職場、地域でも確認を皆さんとしていただけると大変ありがたいと思えますのでどうぞよろしくお願いをします。

本日はどうもありがとうございました。

(拍手)

○事務局

知事、すみません。申しわけありません。少しだけ私たち事務局から会場の皆さんにお知らせをさせていただいてもよろしいでしょうか。

●知 事

はい。

○事務局

すみません。私は、県の広報課で広島県の公式フェイスブックとツイッターの担当をしております寺本と申します。

さて、突然ですけれども、皆さんは、広島県の公式SNSの存在はご存じでしょうか。

広島県では、現在フェイスブックやツイッターといったインターネット上のサービス、SNSを活用して、県内のイベントやグルメ、防災情報、お出かけ情報や観光情報などなど、皆さんの暮らしに役立つ情報を日々発信しています。広島県のSNSは知らなかったという方はぜひ広島県のページを、いいね、またはフォローしていただければと思っております。

ちなみに聞いてみるんですけれども、この中で広島県のフェイスブックとツイッター、ご覧になったことがあるという方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。

ありがとうございます。意外といらっしゃってすごいです。はい。知らなかったという方はですね、ぜひこの機会に広島県のページにいいね、フォローをしていただければと思えます。

フェイスブックやツイッター、やっておられないという方は本日この機会にぜひご登録をして、広島県の情報をキャッチしていただければと思えます。

本日、お配りさせていただいております封筒の中にもオレンジ色のSNSのチラシを入れられます。登録方法がわからないという方がいらっしゃいましたら、この会の終了後も私たち事務局がしばらく会場におりますので、どうぞお気軽に声をかけていただければと

思います。

これからも皆さんの生活のお役に立てる情報を1人でも多くの方にお届けするべく、また本日のチャレンジ・トーク同様、広島県の元気を発信し、どんどん盛り上げるべく、頑張ってまいりたいと思いますので、ぜひとも皆様のお力もお借りできればと思います。

以上です。知事、お時間いただきありがとうございました。

(拍手)

○司 会

事務局からのお願いも聞いていただきまして、ありがとうございました。

以上をもちまして、湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク、閉会といたします。

どうもありがとうございました。

(拍手)

なお、ご来場時にお渡しをいたしておりますアンケートを出口のほうで回収いたしておりますので、よろしく願いいたします。

それから、知事からも紹介がありました、ハザードマップ。後ろのほうにありますので、ぜひご確認いただければと思います。

本日はご参加をいただきましてありがとうございました。どうかお気をつけてお帰りください。ありがとうございました。